

常盤台バプテスト教会 成人科

「聖書日課と分かち合い」 1月号





## 第40課 準備のための聖書日課

### 12月26日(月) イザヤ9:5-6 平和のみどり子

5ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。

ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。

権威が彼の肩にある。

その名は、「驚くべき指導者、力ある神

永遠の父、平和の君」と唱えられる。

6ダビデの王座とその王国に権威は増し

平和は絶えることがない。

王国は正義と恵みの業によって

今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。

万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

闇を照らす光としてのメシアがどのように来られるか記されています。その方はみどりご（赤ちゃん）としてお生まれになり、ひとりの男の子として私たちに与えられます。たとえイスラエルが木のように切り倒され焼かれてしまったとしても、くすぶる切り株が聖なる種となり人々を救う正義をエルサレムにもたらずと約束されています。

### 12月27日(火) ルカ2:15-21 母の思い巡らし

15天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。17その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。18聞いた者は皆、羊飼いたちの話不思議に思った。19しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。20羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりでだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

21八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

メシアは聖霊によって母マリアに宿り、やがてダビデの王座を受け継ぐと言われていましたが、旅の途中の宿の家畜小屋で貧しくお生まれになり、そして最初にお祝いに訪れたのが人々から蔑まされていた羊飼いたちでした。マリアにとっては不思議の連続だったことでしょう。しかしマリアはそれらのことをしっかり心に留めて神の真意に従う決心を示しています。

### 12月28日(水) ルカ2:22-35 シメオンの祝福

22さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。

29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

31 これは万民のために整えてくださった救いで、

32 異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

イスラエルに慰めが与えられ救われることを待ち望んでいたシメオンは、聖霊が宿り救い主に会うまでは死なないという約束を与えられていました。死を前にしたシメオンに生後間もない幼子イエスの将来のみわがが告知され、旧約の時代の終わりを告げています。シメオンは自分を委ねるべき救い主にお会いし神の国を確信し平安を得たのです。

### **12月29日(木) ルカ9：46－48 いちばん偉い者**

46 弟子たちの間で、自分たちのうちだれがいちばん偉いかという議論が起きた。47 イエスは彼らの心の内を見抜き、一人の子供の手を取り、御自分のそばに立たせて、48 言われた。「わたしの名のためにこの子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。わたしを受け入れる者は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである。あなたがた皆の中で最も小さい者こそ、最も偉い者である。」

偉大さをめぐる議論が起き、弟子たちの無理解と自己顕示欲が一層強調される場面です。イエスさまはすぐ近くの子どもの手を取ってそばに立たせます。「わたしの名のために」自分を低くして子どものような者が天国で最も偉い者だと教えられます。私たちが信仰歴や所属教会の規模や知名度などで信仰の大きさを誇示するようなことがないように謙虚さが与えられますように。

### **12月30日(金) ルカ10：21－24 幼子のような者に**

21 そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。22 すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかに、だれもいません。」23 それから、イエスは弟子た

ちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。24 言っておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

21 節の「これらのこと」とは、あなたがたの名前が天国に登録されていること、つまり十字架と復活の意味を理解して信じる者には神さまへと続く道が開かれている（福音、良い知らせ）ということです。福音は自分が利口だと思っている人たちからは隠され、子どものような者たちに現わされます。子どものような素直な心で神の国の現実を見ることができたら幸いです。

### **12月31日（土）ルカ2：39－40 幼子の成長**

39 親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。40 幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

イエスさまは神の子でありながら、ほかの子どもと同じように言葉を覚えたり、律法を学んだり、家の手伝いをしたりして人として成長されました。たくましく育ち知恵に満ち、神の恵みに包まれていました。ガリラヤのナザレという小さな町で「キリストは人間となり、この地上で私たちと共に生活されました。（ヨハネ1：14）リビングバイブルより」

### **1月1日（日）ルカ2：41～52 十二歳のイエス**

41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。42 イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。43 祭りの期間が終わって帰路についたとき、少年イエスはエルサレムに残っておられたが、両親はそれに気づかなかった。44 イエスが道連れの中にいるものと思いい、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、45 見つからなかったもので、捜しながらエルサレムに引き返した。46 三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。47 聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。48 両親はイエスを見て驚き、母が言った。「なぜこんなことをしてくれました。御覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです。」49 すると、イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」50 しかし、両親にはイエスの言葉の意味が分からなかった。51 それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。52 イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。

「お父さんもわたしも心配して捜していたのです」に対して「自分の父の家にいる」と答えられたイエスさま。両親の想いや考えを超えた行動は両親には理解できず受け入れることができません。マリアはこの言葉をただ心に納めます。イエスさまはこの後、両親とナザレに戻り生活されます。やがて真の意味で自立されご自分の道を歩まれるときが来るまで、神と人に愛されつつ成長されます。

（担当：宇佐美 典子）

## 第40課 ショートメッセージ 「十二歳のイエス」

聖書箇所：ルカ2：41－52

暗唱聖句：イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。（ルカ2：52）

今週の聖書教育誌の週題は「十二歳のイエス」です。

四福音書のうち、ユダヤの慣習をあまりよく知らない異邦人にむけて書かれたルカ福音書では、イエス様の少年期の重要な出来事を語っています。「十二歳」、それはユダヤ教において宗教的な意味で「成人」となるという大きな節目の年齢なのです。

現代のユダヤ教の成人式は男子はバル・ミツバと呼ばれ13歳、女子はバット・ミツバと呼ばれ12歳に行われます。ミツバは戒律を意味して、戒律を守ることができる年齢が「成人」とされます。神の前に戒律を守る、自分の行いに責任を持てる年齢に達したという意味で「成人」と考えられるのです。この成人儀式により正式にユダヤ教徒として扱われ、礼拝を構成している人として数えられるのです。法的な意味での成人年齢は18歳のようです。

### 2:41 さて、両親は過越祭には毎年エルサレムへ旅をした。

律法の規定によれば、エルサレム近郊の32キロ以内に住む成人男子はすべて過ぎ越しの祭りに出なければなりませんでしたが、当時の道のりで約140Km、三日はかかるガリラヤのナザレに住んでいたイエス様の両親は毎年、過ぎ越しの祭りのためにエルサレムに上ったと記されています。

### 2:42 イエスが十二歳になったときも、両親は祭りの慣習に従って都に上った。

イエス様が成長して十二歳になった時、両親と一緒に初めての過ぎ越しの祭りに出席するために親戚や村の人々と一緒になって上って行かれたのです。当時は十二歳で「成人」となったのではないかと思われます。現代と年齢の数え方の違いかもしれません。いずれにしてもイエス様は十二歳となり律法を守る責任を持てる年齢に、すなわち「成人」に達したので祭りのためにエルサレムに上って行かれたのです。初めての都・エルサレム神殿は少年イエス様にとって、なにもかもが大切に重要な出会いの時であったと思います。祭りの日には神殿の庭で宗教学者や祭りに上ってきた人々の間で公開討論をするという習わしもありました。

### 2:44～45 イエスが道連れの中にいるものと思い、一日分の道のりを行ってしまい、それから、親類や知人の間を捜し回ったが、見つからなかったので、捜しながらエルサレムに引き返した。

都に上るとき、帰るときは当時の習慣として男性グループと女性グループに分かれて行動していたようです。歩く速さが違うので一日の道のりを終えて宿営する場所で合流していたのです。この時、両親はイエス様がいなかったことにはじめて気づきます。両親は互いに相手のグループにてっきりイエス様がおられるものと思っていたのです。

**2:46～47 三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いている人は皆、イエスの賢い受け答えに驚いていた。**

私には、これまで気になっていたことがあります。それは、イエス様をご自身を「神の御子」とはっきりと自覚されたのはいつだったかということです。そのひとつの答えが、この「十二歳の都上り」のときであったのではないかと今回の学びのなかで思われています。

**2:49 イエスは言われた。「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか。」**

イエス様にとってヨセフは地上でのマリアの夫であり、父でありましたがまことのご自分の父が神であることを、このときにはっきりと自覚されたのではないのでしょうか。

**2:51～52 それから、イエスは一緒に下って行き、ナザレに帰り、両親に仕えてお暮らしになった。母はこれらのことをすべて心に納めていた。イエスは知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された。**

ご自分が「神の御子」という特別な存在であることを自覚されておられましたが、それでも地上でのヨセフとマリアの息子としての務めを誠実に果たされました。人の世で「成人」となられたイエス様は律法にも忠実であり、また人としても両親に仕えられ家業の大工の仕事をこなして一家を養われたのです。それは当時の人々の暮らしぶりを自らも体現なされたのだということです。それゆえに人々の厳しい環境で生きるころのうちによく分かっておられたのでしょうか。受胎告知の天使の言葉を胸に秘めた母マリアは、イエス様の賢さと知恵に満ちた成長を密かに喜んでいたのではないのでしょうか。

私は、この物語を読んで、私たちキリスト者としての「成人」を考えてみました。そして、あくまでも私見ですが思い当たりました。「信仰告白」「バプテスマ」こそが私たちの「信仰の成人式」ではないかと・・・、罪を自覚し、悔い改め、神と人に仕える信仰の歩みをするを神に誓ったそのはじめの一步が私たちにとって「信仰の成人式」なのだと。皆さんはいかがお考えでしょうか。

新しい年のはじめの日に、このみ言葉、イエス様の「成人の出来事」に出会えた幸いを覚えて今年もまた一日一日を大切にみ言葉に聴きながら歩んでいきたいと願われました。

● 分かち合い

- ・ 私たちの信仰生活の旅路のなかで、神の存在を深く意識するときがあると思います。その体験を分かち合ってみましょう。
- ・ その体験から自身の信仰が豊かにされたことを分かち合ってみましょう。

(担当：郷 秀男)

## 第41課 準備のための聖書日課

### 1月2日(月) 申命記8:2~6 神の言葉で生きる

2あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわち御自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。3主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。4この四十年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。5あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。6あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を畏れなさい。

「人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きる」

ここでの「生きる」という言葉はただ生命を維持するという意味だけではなく、神さまを信じ従う人として正しく生きるという「生きる」の意味。「神さまから与えられる言葉で私たちは生かされている」ですね。

### 1月3日(火) エレミヤ15:16 御言葉を食べて

16あなたの御言葉が見いだされたとき  
わたしはそれをむさぼり食べました。  
あなたの御言葉は、わたしのものとなり  
わたしの心は喜び躍りました。  
万軍の神、主よ。  
わたしはあなたの御名をもって  
呼ばれている者です。

御言葉をむさぼり食べ、わたしのものとなり、心が喜び踊る。

エレミヤはその様な経験を積みながら預言者としてエルサレム復興という大切な働きを神さまから託される器へと成長させられていったのではないのでしょうか。

### 1月4日(水) アモス8:11~12 御言葉への飢え

11見よ、その日が来ればと  
主なる神は言われる。  
わたしは大地に飢えを送る。  
それはパンに飢えることでもなく  
水に渴くことでもなく  
主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渴きだ。



12 人々は海から海へと巡り  
北から東へとよろめき歩いて  
主の言葉を探し求めるが  
見いだすことはできない。

バビロン捕囚での状況を預言したものだと考えられます。私たちはいつでも当たり前のように聖書を通して御言葉に触れることが出来ます。恵まれた環境であることを感謝したいですね。

### **1月5日(木) ルカ 22 : 24~30 いちばん偉い者は**

24 また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。25 そこで、イエスは言われた。「異邦人の中では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。26 しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい。27 食事の席に着く人と給仕する者とは、どちらが偉いか。食事の席に着く人ではないか。しかし、わたしはあなたがたの中で、いわば給仕する者である。28 あなたがたは、わたしが種々の試練に遭ったとき、絶えずわたしと一緒に踏みとどまってくれた。29 だから、わたしの父がわたしに支配権をゆだねてくださったように、わたしもあなたがたにそれをゆだねる。30 あなたがたは、わたしの国でわたしの食事の席に着いて飲み食いを共にし、王座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。」

最後の晩餐の時、イエス様から裏切り者がこの中にいると告げられ、お互いが論じ合う中での次の議論です。どんな流れでその議論に移っていったのかが気になりますけど、イエス様は呆れることなく、上に立つ人の正しい姿を教え、これからあなた方がリーダーになっていくことを伝えていきます。

### **1月6日(金) ルカ 23 : 32~38 「自分を救え！」**

32 ほかに、二人の犯罪人が、イエスと一緒に死刑にされるために、引かれて行った。33 「されこうべ」と呼ばれている所に来ると、そこで人々はイエスを十字架につけた。犯罪人も、一人は右に一人は左に、十字架につけた。34 [そのとき、イエスは言われた。「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。】人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った。35 民衆は立って見つめていた。議員たちも、あざ笑って言った。「他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。」36 兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突きつけながら侮辱して、37 言った。「お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。」38 イエスの頭の上には、「これはユダヤ人の王」と書いた札も掲げてあった。

人の醜い部分が出ている読むに堪えない箇所です。子供のいじめの様な印象も受けます。誰の中にもこういう感情があることが嫌になりますが、弱さを認め、表に出さないよう、行動に移すことのないように祈り求めていますね。

## **1月7日（土）ローマ8：35～39 何ものにも引き離されない**

35 だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36 「わたしたちは、あなたのために

一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。37 しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。38 わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39 高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

読むだけで私は耐えられなさそうですが、この様に強く語れるパウロの確信を少しでも持てれば引き離されずに留まれるのかもしれませんが、でも、そんな引き離されるような状況に立たされないように祈り求めたいです。

## **1月8日（日）ルカ4：1～13 荒れ野の試み**

1 さて、イエスは聖霊に満ちて、ヨルダン川からお帰りになった。そして、荒れ野の中を“霊”によって引き回され、2 四十日間、悪魔から誘惑を受けられた。その間、何も食わず、その期間が終わると空腹を覚えられた。3 そこで、悪魔はイエスに言った。「神の子なら、この石にパンになるように命じたらどうだ。」4 イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。5 更に、悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界のすべての国々を見せた。6 そして悪魔は言った。「この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。7 だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。」8 イエスはお答えになった。

『あなたの神である主を拝み、

ただ主に仕えよ』

と書いてある。」9 そこで、悪魔はイエスをエルサレムに連れて行き、神殿の屋根の端に立たせて言った。「神の子なら、ここから飛び降りたらどうだ。10 というのは、こう書いてあるからだ。

『神はあなたのために天使たちに命じて、

あなたをしっかりと守らせる。』

11 また、

『あなたの足が石に打ち当たることのないように、

天使たちは手であなたを支える。』

12 イエスは、『あなたの神である主を試してはならない』と言われている」とお答えになった。 13  
悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた。

マタイ伝ですと霊に導かれて荒れ野に行き、40日間の断食の後に誘惑する者が来たとありますが、ルカ伝ですと40日間誘惑を受け続けられ、その終わりの部分を記しているという意味合いです。悪魔の誘惑は沢山の狡猾なものがありそうですので、こちらの方が腑に落ちます。40日間の断食や誘惑を受け続けてもブレることのないイエス様の信仰。また、しっかりと神さまの御言葉を引用し、あくまでも父なる神さまの御心に従う姿勢を貫いています。そうありがたいですね。

(担当：栗山 義亜)



## 第41課 ショートメッセージ 「荒れ野の試み」

聖書箇所：ルカ4：1－13

暗唱聖句：イエスは、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになった。（4：4）

突然ですが、「修行編」という言葉を耳にされたことがあるでしょうか。これは、「少年ジャンプ」に載るような少年漫画で使われる用語です。主人公が何かの壁にぶつかった時に、特別な修行を行い、これまで以上の強さを手に入れる。そんな王道的なストーリーを指して、「修行編」と呼ぶのです。読者は、主人公がどんな試練を乗り越えて、その先どんな成長を見せるのだろうとワクワクしながら読むことになります。

「荒れ野の試み」はイエスさまがバプテスマを受けられ、いよいよ伝道を始められる直前の出来事ですから、いわばイエスさまにとっての「修行編」…であるかのように読みがちです。確かに神さまの目から見て必要な過程、必要な試練ではあったでしょう。ただ、先週の“12歳のイエス”の出来事が表すように、イエスさまは初めから完全な神の子であらせられ、私たちを導くお方でした。ですから「荒れ野の試み」を読む際も、この試練を通してイエスさまがついに何かに到達した！と捉えるのではなく、既に完全であられたイエスさまが、私たちに誘惑との正しい向き合い方を教えてくださっている、と捉えたいと思います。

悪魔がささやき始める前、イエスさまは荒れ野で40日間過ごされ、空腹でいました。空腹が苛立ちを呼んだり、正常な思考を妨げたりすることは、誰もがご存じのはずです。たとえば出エジプトの出来事においても、民はしばしば飢えや渴きから不平を述べ、神への信頼を失っていました。きっとこの時の悪魔も、空腹がイエスさまを惑わすチャンスになると考えたのでしょう。「神の子ならば、～～してみろ」という挑発的な言い方で悪魔はイエスさまを操ろうとします。実際、イエスさまは数々の奇跡を通してご自身が神の子であることを、示されました。しかしそれら全ては、父なる神の意志とご計画に基づくものであって、悪魔の挑発によるものではありません。またあらゆる奇跡は、たとえば「五つのパンと二匹の魚」がそうであるように、イエスさまから人々への愛が先立つのであって、ご自身の肉体的な欲求を満たすものではありません。神のご計画により、人々に愛と赦しを示すために十字架にすらかかれたイエスさまが、悪魔の言葉で石をパンに変える道理は無いのです。

イエスさまは悪魔に、「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」とお答えになりました。今日の箇所に向けた「準備のための聖書日課」のうち、1/2-4の箇所がここに繋がっています。特に1/2の申命記8：2-6はずばりイエスさまが引用された箇所でもあり、年始に思いを新たにすることも良い箇所かもしれません。

**主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あなたも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。（申命記8：3）**

40年の荒れ野の旅を踏まえて、それらの試練は人が御言葉無くしては生きられないことを知らせるためだった、と主は語られました。私たちの人生もまた苦難の連続ですが、主の御言葉こそが導き、養い、私たちを生かしてくださることを心に留めましょう。

2つ目の誘惑は、地位や名誉と引き換えに、「わたしを拝め」と迫るものでした。1/8の聖書日課（ルカ 22：24-30）で弟子たちが「誰が一番偉いか」と言い争っているように、人の上に立ちたいという思いは多くの人に共通するものです。アダムとエバも見事にこの罠にはまり、神のようになれるという囁きに惑わされ、禁じられた実を口にしました。

この世の中がさまざまな競争によって成り立っている面は否めず、必ずしもそれ自体が悪いことだとは思いません。しかし上へ上へという欲求だけで競うレースに際限はなく、また“上”に行くほど孤独になっていく問題もあります。どのような生き方であれ、イエスさまが答えられたように「神である主を拝み、ただ主に仕える」という思いが根本になれば、悪魔の囁き通り神ならざるものを神とすることになってしまいます。パンではなく、御言葉によって生かされる中で、そのような誘惑に打ち勝たねばなりません。

最後に悪魔は詩編を引用して、イエスさまを試します。神への全幅の信頼を表わすはずの言葉を挑発の道具とし、神は助けてくれるんでしょ、試してごらん、と囁くのです。これもまた甘い誘惑です。あえて危険を冒すことで神への信頼を表わすことは、情熱的で、信仰深いようにも見えます。しかしそこに僅かでも神を試そうとする思いが混じり込むならば、それは悪魔に負けたにも等しいのです。親に抱っこされる赤ちゃんは、決して親が手を離すことがないと信頼し、身を委ねています。親を試すべく、わざともぞもぞ動くようなことはありません。大人になった私たちはあれこれ考えてしまって、赤ちゃんと同じように神さまに身を委ねることは難しい、と思われるかもしれません。やはりそこでも、御言葉に生かされているかどうか、問われるのです。私たちを、主を試すものではなく、主を信頼するものに作り変えてくださるのが、御言葉なのです。

悪魔は何を狙い、イエスさまはどう答えたかをじっくり考える中で、「パンではなく御言葉によって生きる」という最初のイエスさまの答えが、今まで以上に重く深く感じられました。パンの食べ過ぎには注意ですが…御言葉はいくらいただいても魂が健康になっていくのみです。御言葉によって生かされ、養われる良い1年を共に過ごしましょう。

#### ● 分かち合い

- ・ 御言葉を日々いただくために、取り組まれていることはありますか？
- ・ 悪魔の3つの試みの中で、最も印象深いものはどれでしょうか。理由も含めて分かち合いましょう。

(担当：郷 健人)

## 第42課 準備のための聖書日課

### 1月9日(月) 創世記3:8~9 あなたはどこにいるのか

8その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9主なる神はアダムを呼ばれた。

「どこにいるのか。」

禁止されていた「知識の木の実」を食べてしまい初めて「罪」が入り込みます。自分達が裸であることを知り隠れる彼に「どこにいるのか。」と声をかけられる神さまのお怒りと悲しみは、如何ばかりであったでしょう。労働の苦勞も課せられました。それでも私には、毅然とされながらも暖かい優しさが籠った声のように感じます。今も主は私たちに「どこにいるのか、どうしたのか？」と日々語りかけて下さることを感謝いたします。

### 1月10日(火) 創世記4:8~9 きょうだいはどこにいるのか

8カインが弟アベルに言葉をかけ、二人が野原に着いたとき、カインは弟アベルを襲って殺した。9主はカインに言われた。

「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」

カインは答えた。

自分の献げ物に目を留められなかったことに、嫉妬し激しく怒ったカインは弟を殺してしまう。全てをご存じの主の「お前の弟アベルはどこにいるのか。」との問いに「知りません。」としらを切る(罪を隠す)。残念ですが現代でも同じようなことが行われています。主は小さな私たち一人一人をも案じて、「どこにいるのか。」と尋ね続けて下さっておられることを感謝いたします。

「知りません。わたしは弟の番人でしょうか。」

### 1月11日(水) ルカ5:27~32 わたしが来たのは

27その後、イエスは出て行って、レビという徴税人が収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。28彼は何もかも捨てて立ち上がり、イエスに従った。29そして、自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が大勢いて、一緒に席に着いていた。30ファリサイ派の人々やその派の律法学者たちはつぶやいて、イエスの弟子たちに言った。

「なぜ、あなたたちは、徴税人や罪人などと一緒に飲んだり食べたりするのか。」31イエスはお答えになった。「医者者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。32わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」

律法の専門家達がイエス様達に「なぜ、徴税人や罪人などと一緒に食べたり飲んだりするのか。」と揶揄する中で、「わたしが来たのは・・・罪人を招いて悔い改めさせるためである。」とお応えなさいました。私は身体的に人を殺めたことはありませんが、口や態度で(知らずにを含めて)人を傷つけてしまった事が多々あります。その逆もあります。この様な私のためにイエス様が来て下さったことを心より感謝いたします。

### **1月12日(木) ルカ6:6~11 安息日の解放**

6また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。7律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。8イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。9そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」10そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。11ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。

『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちを咎めなかったであろう。(マタイ 12:7)イエス様は人間の必要が儀式的制約に優先することを教え、信仰の新しい世界を開かれました。私達に四角四面に規則遵守を求めるのではなく、一人一人の必要を大切に思い、満たそうとして下さるイエス様のご愛に感謝致します。

### **1月13日(金) ルカ6:37~38 罪人だと決めるな**

37「人を裁くな。そうすれば、あなたがたも裁かれることがない。人を罪人だと決めるな。そうすれば、あなたがたも罪人だと決められることがない。赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦される。38与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。」

『私は隣人が罪を行っているのを見たり聞いたりすることがありますが、それについて他の人に語るように私は命じられてはいません。もしも私が隣人を批判して裁き始めるならば、その隣人が落ち込んだ罪よりもはるかに悪い罪に私は落ち込むことになります。』

(マルチン・ルターの宝石箱より)

41節の「兄弟の目にあるおが屑(小さな罪)は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太(大きな罪)に気付かないのか。」の言葉に襟を正されます。

## 1月14日(土) ルカ7:36~43 「罪深い女」の解放

36 さて、あるファリサイ派の人が、一緒に食事をしてほしいと願ったので、イエスはその家に入って食事の席に着かれた。37 この町に一人の罪深い女がいた。イエスがファリサイ派の人の家に入って食事の席に着いておられるのを知り、香油の入った石膏の壺を持って来て、38 後ろからイエスの足もとに近寄り、泣きながらその足を涙でぬらし始め、自分の髪の毛でぬぐい、イエスの足に接吻して香油を塗った。39 イエスを招待したファリサイ派の人はこれを見て、「この人がもし預言者なら、自分に触れている女がだれで、どんな人か分かるはずだ。罪深い女なのに」と思った。40 そこで、イエスがその人に向かって、「シモン、あなたに言いたいことがある」と言われると、シモンは、「先生、おっしゃってください」と言った。41 イエスはお話しになった。「ある金貸しから、二人の人が金を借りていた。一人は五百デナリオン、もう一人は五十デナリオンである。42 二人には返す金がなかったので、金貸しは両方の借金を帳消しにしてやった。二人のうち、どちらが多くその金貸しを愛するだろうか。」43 シモンは、「帳消しにしてもらった額の多い方だと思います」と答えた。イエスは、「そのとおりだ」と言われた。

この女性は既にイエス様のことを知っていて、信じていたからこそ呼ばれてもいないのにこの食事会に入って来たのでしょうか。自分でも予期しない感情が<sup>ほとばし</sup>り出て泣きだし、その涙はイエス様の足を濡らし、髪の毛を刷毛の様にして拭い、接吻して高価な香油を塗りました。イエス様を信じ罪許された女性の思いの丈を思います。イエス様の赦しに私たちはここまでお慕いと感謝を込めているか問われます。

## 1月15日(日) ルカ5:17~26 あなたの罪は赦された

17 ある日のこと、イエスが教えておられると、ファリサイ派の人々と律法の教師たちがそこに座っていた。この人々は、ガリラヤとユダヤのすべての村、そしてエルサレムから来たのである。主の力が働いて、イエスは病気をいやしておられた。18 すると、男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。19 しかし、群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。20 イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。21 ところが、律法学者たちやファリサイ派の人々はあれこれと考え始めた。「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」22 イエスは、彼らの考えを知って、お答えになった。「何を心の中で考えているのか。23 『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。24 人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に、「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい」と言われた。25 その人はすぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、



神を賛美しながら家に帰って行った。26人々は皆大変驚き、神を賛美し始めた。そして、恐れに打たれて、「今日、驚くべきことを見た」と言った。

友人達によって屋根から吊り下ろされた病人に先ず「あなたの罪は赦された。」とイエス様は宣言されました、訝しげに見つめる律法学者らに「人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」と言われ、(昔病は罪が原因と思われていた時もあり)罪の赦しと共に「起き上がり床を担いで家に帰りなさい。」と病を癒やされました。嬉しいですね。私でしたら賛美しつつスキップで帰ると思います。

(担当：渡部 和子)



イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

ルカ 5 : 20

## 第42課 ショートメッセージ 「あなたの罪は赦された」

聖書箇所：ルカ5：17-26

暗唱聖句：イエスはその人たちの信仰を見て、「人よ、あなたの罪は赦された」と言われた。（5：20）

今回のルカによる福音書5章17節～26節は、マルコによる福音書2章1節～12節からの採用とされていますが、細部に亘りルカの思想に基づいた手直しが施されています。ルカによる福音書の特徴は、ルカが綿密な歴史を順序立てて記していることです。ルカは、医者であり歴史家であったとも言われています。他の福音書では省略されているような事も詳細に書かれています。そしてイエスの譬え話を多く記し「文学的に“史上最も美しい本”」であるとも言われています。

もう一つの特徴としては、イエスの「人間性」に特化した描き方をしていることです。この福音書が書かれた時代のイスラエルは、階級等が重視されており、貧しい人、病人、サマリア人、子ども、女性、罪人、徴税人等の人々が蔑まれていました。

イエスはそのような人々に寄り添い、見捨てることなく、むしろ大きな愛を持って手を差し伸べられました。社会的に疎外されていた人々に対して、特に関心を払う「イエスの憐れみ深い人間性」が描かれています。そして、魂の病にも寄り添い癒すイエスの姿が見事に表現されていることも特徴と言えるでしょう。

5章のテーマは、「イエスの新しい働き」です。

『漁師を弟子にする』では、シモン・ペトロと兄弟のアンデレ、ゼベダイの子のヤコブとその兄弟ヨハネが「人間をとる漁師にしよう」と言われます。

『重い皮膚病を患っている人をいやす』では、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と最初からイエスを「主」と呼びます。この人は、重い皮膚病を癒していただいたばかりではなく、心の病も取り除いていただいたと思われま

今回の聖書箇所である『中風の人をいやす』では、先ず、ファリサイ派の人々と律法の教師たちが群衆の中に同じ様に座っていたとあります。並行箇所のマルコ2章6節、マタイ9章3節では「律法学者」とだけの表記であり、ルカによる福音書だけが「ファリサイ派と律法学者」と記しています。福音書では度々「ファリサイ派と律法学者」が一緒に書かれていますが、それは共に、ユダヤ教の教典を極めて厳格に守ることを指導していた人々であることに由来しています。そして、特にファリサイ派の人々は、サドカイ派と組んでイエスに敵意を持っていたとも言われています。

次に18節～19節で「男たちが中風を患っている人を床に乗せて運んで来て、家の中に入れてイエスの前に置こうとした。しかし群衆に阻まれて、運び込む方法が見つからなかったので、屋根に上って瓦をはがし、人々の真ん中のイエスの前に、病人を床ごとつり降ろした。」とあります。ルカによる福音書においては、運んだ男たちと病人共に、彼らの信仰を見て「罪は赦された」と語られていると理解できるでしょう。病の癒しは、サタンからの解放であるとルカ13章16節でも語られているように、罪の赦しと解放のためのイエスの癒しの業は自然なことであったと思われま

しかしこの言葉に、ファリサイ派の人々と律法学者が、「神を冒瀆するこの男は何者だ。ただ神のほか、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」とあれこれ考えていたと 21 節にあります。彼らの考えていることをお知りになり、その言葉に対してイエスは「何を心の中で考えているのか。『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて歩け』と言うのと、どちらが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」とお答えになります。

イエスは、イエスに働く『主の力』によってその権威が与えられおり、見えない罪の赦しを可視化できる病の癒しによって、神の次元における領域を表したのだと思われま

そして、中風の病の人は、「すぐさま皆の前で立ち上がり、寝ていた台を取り上げ、神を賛美しながら家に帰って行った。」と 25 節にあります。『主の力』がイエスに働き、主への賛美を捧げ新しい身体となったことを証明し、人々もまたこの奇跡に大変驚いて

『神を賛美し始めた』と 26 節に記されます。奇跡物語の形式における、証人としての反応という驚きだけではない、『主の力』を与えられしイエスによる、神の救いと御業の証人であったのだと思われま

この神の救いと赦しは、現代を生きる私たちにも、イエスさまを通して等しく注がれていることを、心から感謝しなければならないと思われました。自分の罪を赦して頂きたいと告白する姿、真っ直ぐな信仰、疑うことなく祈る姿を、主は大きな愛でご覧になっていると思

続く『レビを弟子にする』では、徴税人に個人的に声をかけ、「わたしに従いなさい。」と言われます。そしてやはりここでも、ファリサイ派の人々と律法学者はイエスを非難します。するとイエスは「医者を必要とするのは、健康な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである。」とお答えになります。全ての人々に悔い改めのチャンスがあることを、私たちは知ることができます。

『断食についての問答』では、婚礼の譬えを通してイエスの救いの時を表しています。イエスによる新しい秩序は、古い形式にこだわる民族宗教とは相容れず、イエスの新しい秩序による救いを無理やり閉じ込めようとすれば、双方が壊れてしまいます。イエスの救いは、新しい精神、徴税人や『罪人』をも受入れる精神であり、全ての律法をも超える精神であると同時に救いであると言えるでしょう。

今回の聖書箇所、そして 5 章全体のお話を通して、皆さまはどのようなメッセージを受け取られますでしょうか・・・。

● 分かち合い

- ・ 聖書でのイエスさまの奇跡の中で、あなたが最も影響を受けた聖書箇所はどこですか？

(担当：岩崎 秀子)

## 第 43 課 準備のための聖書日課

### 1月 16 日 (月) 創世記 2 : 1~4a 祝福と聖別の日

1 天地万物は完成された。2 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。3 この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。4 これが天地創造の由来である。

第七の日に、神はご自分の仕事を離れ安息されました。この日を神は祝福し、聖別されました。神さまは第七の日を大切な日とされました。後世の私たちのために神さまは、第七の日に安息をしてくださったのかも…。

### 1月 17 日 (火) 出エジプト 20 : 8~11 休み、休ませる日、

8 安息日を心に留め、これを聖別せよ。9 六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、10 七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。11 六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。

「安息日を心に留め、これを聖別しなさい」神さまは言われます。この日は仕事を止め、心と体を休め、天地万物をお造りになった神さまに感謝し、神さまに生かされていることを喜び祝う日です。

### 1月 18 日 (水) 申命記 5 : 12~15 解放を思い起こす日

12 安息日を守ってこれを聖別せよ。あなたの神、主が命じられたとおりに。13 六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、14 七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、牛、ろばなどすべての家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。そうすれば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができる。15 あなたはかつてエジプトの国で奴隷であったが、あなたの神、主が力ある御手と御腕を伸ばしてあなたを導き出されたことを思い起こさねばならない。そのために、あなたの神、主は安息日を守るよう命じられたのである。

あなたが休めば、あなたの男女の奴隷もあなたと同じように休むことができます。あなたはかつてエジプトの国で、奴隷として過ごしていました。神さまの御手により、あなたを導き、救い出してくださいました。これを覚えて、安息日を守りなさい。神さまは、いつもあなたを見守って下さっています。

## **1月19日(木) サムエル上 21:1~7 ダビデの場合**

1ダビデは立ち去り、ヨナタンは町に戻った。2ダビデは、ノブの祭司アヒメレクのところに行った。ダビデを不安げに迎えたアヒメレクは、彼に尋ねた。「なぜ、一人なのですか、供はいないのですか。」3ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王はわたしに一つの事を命じて、『お前を遣わす目的、お前に命じる事を、だれにも気づかれるな』と言われたのです。従者たちには、ある場所で落ち合うよう言いつけてあります。4それよりも、何か、パン五個でも手もとにありませんか。ほかに何かあるなら、いただけますか。」5祭司はダビデに答えた。「手もとに普通のパンはありません。聖別されたパンならあります。従者が女を遠ざけているなら差し上げます。」6ダビデは祭司に答えて言った。「いつものことですが、わたしが出陣するときには女を遠ざけています。従者たちは身を清めています。常の遠征でもそうですから、まして今日は、身を清めています。」7普通のパンがなかったので、祭司は聖別されたパンをダビデに与えた。パンを供え替える日で、焼きたてのパンに替えて主の御前から取り下げた、供えのパンしかなかった。

ダビデも、しもべの者も空腹でした。「何か、食べる者があればいただけますか」「聖別されたパンならあります」祭司は聖別されたパンをダビデに与えました。そこには、何のためらいもありませんでした。

## **1月20日(金) ルカ 13:10~17 働くべき日は今日**

10安息日に、イエスはある会堂で教えておられた。11そこに、十八年間も病の霊に取りつかれている女がいた。腰が曲がったまま、どうしても伸ばすことができなかった。12イエスはその女を見て呼び寄せ、「婦人よ、病気は治った」と言って、13その上に手を置かれた。女は、たちどころに腰がまっすぐになり、神を賛美した。14ところが会堂長は、イエスが安息日に病人をいやされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て治してもらうがよい。安息日はいけなない。」15しかし、主は彼に答えて言われた。「偽善者たちよ、あなたたちはだれでも、安息日にも牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。16この女はアブラハムの娘なのに、十八年間も間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったのか。」17こう言われると、反対者は皆恥じ入ったが、群衆はこぞって、イエスがなされた数々のすばらしい行いを見て喜んだ。

安息日にイエスさまは十八年間も病の霊にとりつかれ、腰のまがったままの女を見て呼び寄せた。

そして、その病を癒された。女の腰はまっすぐになり、女は神を賛美した。

会堂長は言った。「働く日は六日もある。その間に来て、治してもらうのがよい。安息日はいけなない」「苦しんでいる人が目の前にいる。安息日であっても、その苦しみを解いてやるべきではないか」群衆はこぞって、イエスさまの行いを見て喜んだ。

## **1月21日(土) ルカ14:1~6 安息日に病気を癒やす**

1安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。2そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。3そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」4彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。5そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」6彼らは、これに対して答えることができなかった。

「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」彼らは、これに対して答えることができなかった。律法を守ることはとても大切です。でも、もっと大切なものがあります。それは「愛」です。

## **1月22日(日) ルカ6:1~11 安息日の主**

1ある安息日に、イエスが麦畑を歩いて行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。2ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にははならないことを、あなたたちはするのか」と言った。3イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。4神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」5そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」

6また、ほかの安息日に、イエスは会堂に入って教えておられた。そこに一人の人がいて、その右手が萎えていた。7律法学者たちやファリサイ派の人々は、訴える口実を見つけようとして、イエスが安息日に病気をいやされるかどうか、注目していた。8イエスは彼らの考えを見抜いて、手の萎えた人に、「立って、真ん中に出なさい」と言われた。その人は身を起こして立った。9そこで、イエスは言われた。「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」10そして、彼ら一同を見回して、その人に、「手を伸ばしなさい」と言われた。言われたようにすると、手は元どおりになった。11ところが、彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った。

ファリサイ派も、神さまが与えてくれた律法を守ることが正しいと信じています。それはよいことです。律法は正しい教えです。しかし、言葉の意味を取り違えて理解をし、信じてしまうと、神さまの伝えたい正しさが違ってしまいます。～だから、～しなければならない。～してはならない。律法に縛られる身になってしまいます。律法には、神さまの愛があることを知ってほしいです。

日曜日(安息日)は、礼拝を守り、イエスさまのみ言葉にふれ、イエスさまが共にいて下さることに感謝をし、生かされていることへの喜びの日といたしましょう。

(担当:小沢 敬一)

### 第43課 ショートメッセージ 「安息日の主」

聖書箇所：ルカ6：1－11

暗唱聖句：安息日に律法で許されているのは、…命を救うことか、滅ぼすことか

(6：9)

先週学んだルカによる福音書5章のテーマは「イエスの新しい働き」でした。その新しい働きをファリサイ派の人々は認めず、イエスさまを批判しました。今回の聖書箇所では、安息日をめぐってファリサイ派の人々と対峙するイエスさまが描かれています。

天地を創造された神は全ての作業を終えて第七日に休まれました。その第七日を祝福して聖別された土曜日の聖書日課、創世記2章3節に書かれています。

神の掟である十戒にも「七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。」(火曜日の聖書箇所、出エジプト記20章8～11節)と書かれています。水曜日の聖書日課、申命記5章15節には、奴隷として過ごしていたエジプトから神が導き出してくださったことを憶えて安息日を守るようにと書かれています。

つまり、安息日は、私たちの創造の主、贖いの主からの恩寵、恩恵を憶え、感謝し、喜ぶ日なのです。

安息日は金曜日の日没から土曜日の日没までで、ユダヤの人々は安息日を大切に守り、神さまを礼拝していました。しかし、安息日を守るために、安息日にはいけない禁止事項を設け、厳しく守っていたファリサイ派の人々は、イエスさまや弟子たちが安息日を守らなかったと言って、批判します。

どのように守らなかったのでしょうか？

一つ目は、安息日に麦畑を歩いていた時に、おなかをすかせたイエスさまの弟子たちが、麦の穂を摘んで手で揉んで食べたことを責めています。安息日もお腹はすきますから、食べることは許されています。しかし、食べるために手で麦の実をもみほぐす行為が労働に相当するということです。前日までに安息日の食事の準備をしておくことができない場合は、安息日は何も食べずに空腹に耐えるしかないということです。そこで、イエスさまはダビデのことを取り上げて、神さまは規則を守ることよりも、本当に大切なものを選び取っていくことを良しとされるお方であることを私たちに伝えてくださっています。

二つ目は、安息日に手の萎えた人を癒したことを批判しました。安息日に許されていることは、命の危険のある人の治療だけです。ファリサイ派の人たちはイエスさまが癒すであろう

ことを予想して、イエスさまを訴える口実にするために、見張っていたのです。そのこともすべてご存知のイエスさまは、「安息日に律法で許されているのは善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか。」と尋ね、癒しの業を行われます。

私たち人間は弱いものです。日常の雑事に追われ、目に入るもの、耳に入る音に気を取られ、神さまのことを忘れてしまうことがよくあります。ですから、安息日は、主のことだけを憶え、感謝し、喜んで過ごすために、他のことは何もしないでいることが大切です。しかし、それがエスカレートして、あれをしたらダメ、これをしたらダメ、何メートル以上移動したらダメと事細かな規則ができてしまったのです。その結果、大切な「主を憶える」が欠落してしまい、「何もしない」ことが何よりも大切なことになってしまいました。そしてその規則を守らない人を批判し、取り締まるのが、神さまに近づく行為であると勘違いするようになり、主を賛美するための安息日が、人が人を裁くための窮屈なものに変わってしまったのです。そして、イエスさまに、「善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、滅ぼすことか」と尋ねられたファリサイ派の人々は、自分たちの過ちに気づくどころか、怒り狂って、イエスを何とかしようとした話合っただけというのですから、頭が固く、視野が狭くなるというのは、神さまが見えなくなり、自分たちが一番だと思ってしまうとても恐ろしい状態なのだと思います。

現代の私たちは、日曜日を主日として大切に守り、神さまに礼拝をおささげしていますが、日曜日に働かざるを得ない方々も大勢いらっしゃいます。日曜日にも働いてくださる方々のお働きに支えられて、私たちは礼拝を守ることができています。様々な事情で日曜日に礼拝することができない方々を批判することなく、また、日曜日に用事が入ったとしても、主に感謝し、喜ぶことを忘れず、だれもが皆、すべてを神さまにささげて、100%神さまの方を向いて過ごす時を持つことができるよう、考え、祈って行かなければならないと思います。

● 分かち合い

- ・ 主日を大切にして、神さまにおささげする時間を守るために気にかけていることはありますか？
- ・ 何かを守るために必死になり過ぎて、大切なものを見失ってしまった経験はありますか？

(担当：田中 由記子)



## 第44課 準備のための聖書日課

### 1月23日(月) マラキ書3:1 道を備える使者

1 見よ、わたしは使者を送る。

彼はわが前に道を備える。

あなたがたが待望している主は

突如、その聖所に来られる。

あなたがたが喜びとしている契約の使者

見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。

「使者」はメシアが来られる前に道を備える者のことです。そして「あなたがたが待望している主」はメシア=イエス・キリストです。この方は「契約の使者」とも呼ばれます。バプテスマのヨハネは人々に自分の罪を告白し悔い改めてバプテスマを受けるように勧めましたが、これは人々がイエス・キリストによる罪の赦しを得るための備えでした。

### 1月24日(火) ルカ3:1~14 ヨハネの登場

1 皇帝ティベリウスの治世の第十五年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、2 アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒野でザカリアの子ヨハネに降った。3 そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。4 これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。

「荒野で叫ぶ者の声とする。

『主の道を整え、

その道筋をまっすぐにせよ。

5 谷はすべて埋められ、

山と丘はみな低くされる。

曲がった道はまっすぐに、

でこぼこの道は平らになり、

6 人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」

7 そこでヨハネは、洗礼を授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。8 悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。9 斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」10 そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。11 ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。

食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。12 徴税人も洗礼を受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。13 ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。14 兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。

神の斧はすでに木の根元に置かれており、悔い改めにふさわしい実を結ばなければ切り倒され火に投げ込まれると警告しています。「わたしたちはどうすればよいのですか」という問いに対して、貧しい人に分けてやり、人から取り立てたり、ゆすり取ったり、だまし取ったりしないこと、アブラハムの子孫だから神と良い関係にあるから救われると信じ切っている人々に、律法による救いではなく罪の赦しによる救いがもたらされることを力強く宣べ伝えています。

### **1月25日(水) ルカ3:15~20 ヨハネの「メシア像」**

15 民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。16 そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水で洗礼を授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。17 そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」18 ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。19 ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、20 ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。

ローマ帝国の支配下にあったユダヤの人々はメシア到来を切望していました。人々はヨハネの宣教を聞いて彼がメシアなのではないかと考えます。ヨハネは自分のあとに優れた方が来ると語ります。その方は人間という存在をはるかに超えられた神の子であられると。神の国の契約はヨハネによっては語られておらず、新しい契約の時代へと向かう道を整える備えにヨハネが遣わされたのです。

### **1月26日(木) ルカ16:14~18 これまでとこれから**

14 金に執着するファリサイ派の人々が、この一部始終を聞いて、イエスをあざ笑った。15 そこで、イエスは言われた。「あなたたちは人に自分の正しさを見せびらかすが、神はあなたたちの心をご存じである。人に尊ばれるものは、神には忌み嫌われるものだ。16 律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている。17 しかし、律法の文字の一面がなくなるよりは、天地の消えうせる方が易しい。18 妻を離縁して他の女を妻にする者はだれでも、姦通の罪を犯すことになる。離縁された女を妻にする者も姦通の罪を犯すことになる。」

ファリサイ派の人々のように神を愛することよりも律法を守ることを優先することをイエスさまははっきりと非難されます。お金に執着するファリサイ派の人々は律法を守っていれば、神に経済的にも祝福され「人々の前で尊ばれる」はずでした。律法は自分の正しさを見せびらかすための手段だったのです。イエスさまは新しい時代の始まりについても語られました。イエスさまの十字架と復活を信仰の中心に置き新しい契約の道を歩めますように。

### **1月27日（金）使徒 10：34～43 ヨハネの後に**

34そこで、ペトロは口を開きこう言った。「神は人を分け隔てなさらないことが、よく分かりました。35どんな国の人でも、神を畏れて正しいことを行う人は、神に受け入れられるのです。36神がイエス・キリストによって——この方こそ、すべての人の主です——平和を告げ知らせ、イスラエルの子らに送ってくださった御言葉を、37あなたがたはご存じでしょう。ヨハネが洗礼を宣べ伝えた後に、ガリラヤから始まってユダヤ全土に起きた出来事です。38つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。39わたしたちは、イエスがユダヤ人の住む地方、特にエルサレムでなされたことすべての証人です。人々はイエスを木にかけて殺してしまいましたが、40神はこのイエスを三日目に復活させ、人々の前に現してくださいました。41しかし、それは民全体に対してではなく、前もって神に選ばれた証人、つまり、イエスが死者の中から復活した後、御一緒に食事をしたわたしたちに対してです。42そしてイエスは、御自分が生きている者と死んだ者との審判者として神から定められた者であることを、民に宣べ伝え、力強く証しするようにと、わたしたちにお命じになりました。43また預言者も皆、イエスについて、この方を信じる者はだれでもその名によって罪の赦しを受けられる、と証ししています。」

私たちは外見や能力・条件などによって人を分け隔ててしまいますが、神さまはそのまま受け入れてくださいます。キリストの福音はユダヤ人と異邦人の分け隔ての壁を打ちこわし、そしてこの方を信じる者は誰でもその名によって罪の赦しを受けられるとペトロは語ります。自分の価値観に縛られることなく真の神さまのみことばを身につけたいと願います。

### **1月28日（土）使徒 18：24～19：7 イエスの名によるバプテスマ**

24さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに came。25彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。26このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたプリスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。27それから、アポロがアカイア州に渡ることを望んでいたのも、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに助け

た。28 彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたからである。

1 アポロがコリントにいたときのことである。パウロは、内陸の地方を通過してエフェソに下って来て、何人かの弟子に出会い、2 彼らに、「信仰に入ったとき、聖霊を受けましたか」と言うと、彼らは、「いいえ、聖霊があるかどうか、聞いたこともありません」と言った。3 パウロが、「それなら、どんな洗礼を受けたのですか」と言うと、「ヨハネの洗礼です」と言った。4 そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」5 人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。6 パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。7 この人たちは、皆で十二人ほどであった。

パウロがエフェソで出会った弟子たちは、アポロの働きによって信仰を持った人たちです。どんなバプテスマを受けたのかと尋ねると、ヨハネのバプテスマ（悔い改めのバプテスマ）と答えました。大切なことは悔い改めることだけではなく、イエスさまを救い主として受け入れることです。イエスのみ名によってバプテスマを受けたアポロの弟子たちは聖霊に満たされ、キリストのうちに生かされます。

### **1月29日（日）ルカ7：18～35 ヨハネの時、イエスの時**

18 ヨハネの弟子たちが、これらすべてのことについてヨハネに知らせた。そこで、ヨハネは弟子の中から二人を呼んで、19 主のもとに送り、こう言わせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」20 二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」21 そのとき、イエスは病氣や苦しみや悪霊に悩んでいる多くの人々をいやし、大勢の盲人を見えるようにしておられた。22 それで、二人にこうお答えになった。「行って、見聞きしたことをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。23 わたしにつまずかない人は幸いである。」24 ヨハネの使いが去ってから、イエスは群衆に向かってヨハネについて話し始められた。「あなたがたは何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。25 では、何を見に行っただのか。しなやかな服を着た人か。華やかな衣を着て、ぜいたくに暮らす人なら宮殿にいる。26 では、何を見に行っただのか。預言者か。そうだ、言うておく。預言者以上の者である。

27 『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、

あなたの前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。28 言うておくが、およそ女から生まれた者のうち、ヨハネより偉大な者はいない。しかし、神の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。」29 民衆は皆ヨ

ハネの教えを聞き、徴税人さえもその洗礼を受け、神の正しさを認めた。 30 しかし、ファリサイ派の人々や律法の専門家たちは、彼から洗礼を受けないで、自分に対する神の御心を拒んだ。

31 「では、今の時代の人たちは何にたとえたらよいか。彼らは何に似ているか。 32 広場に座って、互いに呼びかけ、こう言っている子供たちに似ている。

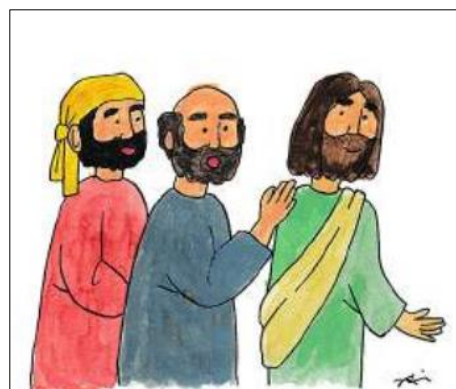
『笛を吹いたのに、  
踊ってくれなかった。

葬式の歌をうたったのに、  
泣いてくれなかった。』

33 洗礼者ヨハネが来て、パンも食べずぶどう酒も飲まずにいと、あなたがたは、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、 34 人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。 35 しかし、知恵の正しさは、それに従うすべての人によって証明される。』

ヘロデ王が依然として権力を振るっており、ヨハネは獄に捕らわれて不安に陥っています。イエスさまは病気に苦しんでいる人たちと共にいて癒しておられます。ヨハネはメシアが来られたらメシア国ができると考えていました、主イエスによって到来する神の国は、目に見える社会的改革や政権交代ではなく、福音によって希望へと繋がる道を歩むことです。イエスさまによって癒された人々はみな喜びに満たされて賛美しながら帰っていきました。

(担当：宇佐美 典子)



まず 貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。

ルカ 7 : 22 ~ 23

## 第44課 ショートメッセージ 「ヨハネの時、イエスの時」

聖書箇所：ルカ7：18－35

暗唱聖句：貧しい人は福音を告げ知らされている。

わたしにつまずかない人は幸いである。(7：22－23)

今週の聖書教育誌の週題は「ヨハネの時、イエスの時」です。

### マルコ 1:4

**洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。**

洗礼者のヨハネは悔い改めのバプテスマをユダヤの人々に呼びかけて授けました。それはこれまでのユダヤ社会の概念を超える革新的なものでした。それ以前はユダヤ教に改宗した異邦人が象徴的な魂・人格の洗いとして受けることが必要とされていたのです。しかし、神は洗礼者ヨハネを通して、すべてのユダヤの民が公にバプテスマを受けることで自らの罪の悔い改め(回心)を表すように命じられたのです。

### ルカ 3:2～3

**アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリヤの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。**

イエス様はこのヨハネによりバプテスマを受けられた後、神の国の宣教を始められました。また、彼の言動は多くの当時の宗教指導者には異端であり侮蔑的でさえありました。彼はたとえ王であっても律法に許されないことには厳しく糾弾しました。そのためヨハネはヘロデ王により牢獄につながれる身となってしまったのです。

### ルカ 3:18～20

**ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。ところで、領主ヘロデは、自分の兄弟の妻ヘロディアとのことについて、また、自分の行ったあらゆる悪事について、ヨハネに責められたので、ヨハネを牢に閉じ込めた。こうしてヘロデは、それまでの悪事にもう一つの悪事を加えた。**

イエス様の福音宣教の働きは極めて具体的にあらゆる病人をいやし、悪霊に苦しむ人をいやし、弟子を選び、そのお働きは異邦人にも及びました。牢に囚われていたヨハネは弟子たちからイエス様の宣教活動を聞いて「メシア・救い主」であることに弟子たちが確信を持てずにいることを悟り、彼らをイエス様のもとに送りました。

**7:20 二人はイエスのもとに来て言った。「わたしたちは洗礼者ヨハネからの使いの者ですが、『来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか』とお尋ねするようにとのことです。」**

イエス様は言われました。「**貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである。**」弟子たちは実際にイエス様に出会い、その言葉を聞き、まことの「救い主」であることを確信したのだと思います。続いてイエス様は民衆に向かい洗礼者ヨハネについて預言者のなかの預言者以上の者であると言われました。同時に天の御国においてはもっとも小さい者でも彼よりは大きいと言われたのです。御国の栄光・知恵の正しさは、それ

に従う人の行状によって、すなわち私たちキリスト者によって証明されると言われます。これらは真理だと胸に刻み自分を律したいと願わされました。

洗礼者ヨハネは旧約聖書に約束された「主の道を備える者」として、その「ヨハネの時」を与えられたのです。ヨハネが授けた悔い改めのバプテスマはイエス・キリストの到来と来るべき審判への備え・準備のものでありました。それゆえにヨハネのバプテスマを受けた人は、キリスト者としてのバプテスマを受ける必要があったのです。

#### **使徒言行録 19:4～5**

**そこで、パウロは言った。「ヨハネは、自分の後から来る方、つまりイエスを信じるようにと、民に告げて、悔い改めの洗礼を授けたのです。」人々はこれを聞いて主イエスの名によって洗礼を受けた。**

このようにヨハネのバプテスマとイエス・キリストにより制定されたバプテスマには連続したつながりがあるのです。今、私たちは「救い主イエス・キリストの時」を信仰の旅路として歩ませていただいています。私たちの「イエスの時」である地上での使命はキリストが再び来られる(再臨)のときまでイエス様から与えられた大宣教命令に忠実に仕えていく者であることです。

#### **マタイ 28:18～20**

**イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」**

福音書にはイエス様と出会った人たちが心も身体も魂もいやされ救われたと喜び、変えられていった様子が生き生きと語られています。現代においてはヨハネのバプテスマに与ることがなくてもイエス様が備えてくださったバプテスマにより十字架からの悔い改めと贖いとキリストの復活の約束を信じることにより救われます。これまでもこれからもイエス・キリストは私たち一人ひとりをじっと愛をもって見守っておられるのです。

私自身の人生を振り返ってみても、自分の気づかない時からイエス様のタッチ・出会い・助けがあったことが思い浮かびます。幼少期の路傍テントで、配られた小冊子で、友人から誘いで、などなどそれは決して自分を誇っていた時期ではなく、無力感や孤独感にさいなまれていた時と重なっているのです。

#### **申命記 1:31**

**また荒れ野でも、あなたたちがこの所に来るまでたどった旅の間中も、あなたの神、主は父が子を背負うように、あなたを背負ってくださったのを見た。」**

主イエス・キリストと共に歩む人生が赦されていることに心から感謝をしています。

#### ● 分かち合い

- ・ あなたがイエス様に出会ったときを思い起こしてみましょう。
- ・ キリストの愛は私たちの大切な隣人にも注がれています。あなたはどなたのために祈りますか。

(担当：郷 秀男)



2023.1 成人科